

北海道百年

開拓使・三県時代編



序文

はじめに

北海道の成り立ち

九

夜明け前

三

先住の人々

六

アイヌの生活

三

和人の渡道

五〇

松前藩の成立

五

新しき天地

五五

入植

五七

殖産

五三

教育

五一

生活

五〇

北海道開拓記念館

三四

あとがき

北海道簡略年表

後編 安彦勝博

先史時代に住んでいた人たちの種族はつきりしない。発掘調査された人骨は少なくないが、各年代ごとに特徴があり、ま

た地域によって異なる。しかし、「夜明け前」で述べたように、土器文化の推移をみると、大陸と地続きだった旧石器時代以降、北海道にやってきた人たちは、北海道が島本州から新しい文化を持った人が次々渡来し、原住民と同化していったことがわかる。

これら渡来者の中で、もっともはつきりしているのが「オホーシク文化」を持ってきたモヨロ貝塚人で、その

先史民族とアイヌ

骨格は道内各地で発見されたものとは著しく異なっている。しかし、その消長はわからず、おそらく近世アイヌ

の中で、最初の原住民がアイヌであるかどうかは、前述のようにわかっていない。ただ多くの遺物は、アイヌの祖先がつくったというのが定説になりつつあるし、擦文文化末期の遺物にアイヌ民族の特徴であるイナウ（木彫的な木片が見つかり、その住居や墳墓も円形から近世アイヌと似た方形に変わっていることから、アイヌ先祖の定着はかなり早い時期だったとみられている。

イナウは人間と神の仲立ちをする祭事用具で、擦文文

化時代すでにそうした精神文化を示すようなものが見つかっていることは、それよりかなり以前にアイヌが誕生していたことを物語る。また縄文末末期（四、五世紀）と推定される二つの人骨（江別、坊主山、室倉・オノヨリナ）はアイヌ的なアイヌを備えており、この時代にすでにアイヌの先祖がいた——と推定してよいだろう。

蝦夷とアイヌ

『日本書紀』は、東北地方に進出した大和民族に抵抗した人々を「愛弥詩」、



「アイヌの12ヵ月屏風」の一面（平沢屏山筆）

異民族としては、自ら「アイヌ」（人、もしくは男の意味）と呼んでいた北の島の蝦夷しかいなかったころからである。

アイヌが確実に記録されたのは

正平十一年（一三五六年）に出た『諏訪大明神祭詞』である。

これは東北の安東氏に討手を向けた鎌倉幕府軍が執拗な抵抗と積雪のために苦戦したが、諏訪

大隅神の靈験によって勝利をおさめたという記録で、その第三卷にアイヌが出てくる。

「安東嶺に北の島（北海道）の蝦夷が多数底瑳。男は手深く甲冑弓矢を帯びて進み、女は後方にあって木幣を持ち、呪声をあげた」とあり、この描写からすると、この人たちはもう近世アイヌそのものである。

さらに北海道の蝦夷がアイヌと自称していることが天正十八年（一五九〇年）に報告されている。

和人はもちろん、周囲のモンゴリアンとも異なつた容姿、風俗、習慣、言語を持つていた蝦夷が、ここで初めて「アイヌ人種」として区別されることになった。

北海道の先史時代の遺物は、コロポックルが残したものだとする説があつた。コロポ

ックとは（Kai-Pok）(音)カイポク「語の下の人」と呼ばれる伝説上の先住民族である。

Kai-Pok (音)カイポクは、人なみはずれた能力を持つ者、もしくは影と訳されるもので、古くは神の意味に使われた。したがってコロポックルは神であり、それが Kai-Pok

時代には日の出る東方の千島蝦夷をこう呼んだ。唐子とは、喜田貞吉博士によれば、オロッキのなまりであつて、カラフトなど西部興地の者をさしたらしい。カラフトは古くから松前地方では「カラ」と呼ばれ、中国大陸すなわちカラ（唐）への渡り口と考えられていた。

以上のことから、アイヌは本州の影響を受けた一派と、カラフトを通して大陸の影響を受けた者、そして千島を通して北方民族の影響を強く受けていた三派が共存していたことになる。このうち本州との交流については、「蝦夷とアイヌ」で紹介した『諏訪大明神絵詞』にもアイヌが出てくるし、『十三往来』（十四世紀）には「夷船、京船群来して交易す」と記録されている。十三とは日本海に面した津軽半島のつけ根にある町の名で、後の松前藩成立に深く関係してくる。

余話

人間創造

天地を創造したニタシカラカムイは国造りを終えたが、何か物足りなかつた。そばにいた夜の神様に、

（き）とどんな関係にあるのかはわからない。

ところでアイヌによれば、先住のコロポックルは、一本の草を数千人でかつぎ、一枚のフキの葉の上に数千人も乗れたという一寸法師のような小人だ。すばしこく、姿を見せることをきらふつたと伝えられている。

あるときとらえてみると、口の周囲と手に入れ墨をした。アイヌの婦人が入れ墨するのは、これにならつたといわれる。しかしそのあかしは何ひとつなく、コロポックル説話は、どこまでもアイヌの伝説である。

古い史書にしろされた蝦夷千島（北本州との交流 海道）に住むアイヌは、日ノ本、唐子、渡党の三派に分けられるという。

渡党は和人とまじわり、多毛であるが本州の言葉をし、文化の影響も強く受けた。ときには血のまじわりもあつたとみられ、その名前からいって、津軽方面から渡つてきた者の子孫であろうといわれている。

日ノ本とは、「チエノカグル」（首の出衆）と呼ばれ、江戸

「何かお前の思いつくものを一つくってみろ」と言いつけた。

夜の神はしきりに首をひねつたが、よい考えが浮かばず、足元の泥を手にくいおけて、それをまるめた柳の木を折って細長くまるめた泥の中に通し、ヘコベを一方に植え、アユギ（死んだものを生き返らす力を持つた魔）でバタバタとおおいだ。

泥がしだいに乾いてきて、人間の肌になり、ヘコベを植えたところが頭になり、ヘコベが髪になった。

喜んだ神様は、それに「食べたい」「眠むたい」とかいち、十二の窓の玉を身体に入ると、完全な人間ができ上がった。

ニタシカラカムイも喜んだが、夜の神でつくった人間はどれも男ばかり。そこで星の神様にも協力してもらい、人間をつくることにした。すると星の神の人間は女ばかりなので、人間もたくさん多くなつていった。男の肌が悪いのは、夜の神がつくつたからであ

り、女の肌は昼の神がつくったので白かった。人間が年をとって腰が曲がるのは、老木になると曲がる柳の木を背骨にしたからである。

こうして人間をつくった夜と昼の神は、ほめられて天に昇り、月と太陽になったという。(北見美幌・菊地儀之助老伝承『アイヌ民話集』から)

アイヌの生活

木の皮をばく

みよう。

アイヌの生活を四季を追ってながめて

アイヌは春がきたことを「トイタシネ」（日あしのびる）

と言う。二月ごろ凍った堅雪の中で、最初にする仕事は

「バアラビ」と呼ぶ、木の皮はぎのことである。春の息

吹を感じた樹木は、大量に樹液を分泌しはじめ、新陳代

謝も活発になるので、樹皮をはがしやすい。アジンを織

るオヒョウの皮、それを染色するヘソの皮、家の屋根や

生活器具をつくる樺の皮など、必要な樹皮はすべて、こ

の季節にとった。

ことに衣服の繊維になったオヒョウの皮はぎは、重要

な作業のひとつだった。アイヌは古くは毛皮、魚皮など
を身にまとい、本州との交流が進むにつれ、織機や

ハタ織りの技術が移入されて、植物繊維の衣服を着るよ
うになった。繊維は「いざりばた」（簡単な織機）ですわ

って織る簡単なものである。

皮はぎは女性の仕事である。直径一五センチぐらいの

オヒョウの繊維が最もよく、弾力に富み、よい糸がとれ

た。樹木の衣服を借用するという考え方で、木に折願し

てから根元に鉋で傷を入れ、一気に梢の先まで帯状には

ぎ取る。しかし必ず北に面する皮は残しておき、丸はだ

かにするようなことはなかったという。

皮は温泉や沼水につけ、ドロドロした繊維だけが残る
と干し、薄皮をはぐようにして繊維をバラし、さらに細
く裂いてよりをかけ、次々に糸玉をつくった。現在は観
光品になったアツシだが、その昔はきめこまやかな生活
の縁飾がこめられていたわけである。

原野の春

春を告げる草花はフクジュソク、フキノト
ウ、イチゲ類、わずかに遅れてニリンソ
ウ、エノエンゴサク、カタクリなどが、このうち現在
でも山菜として人気のあるエノエンゴサクは、アイスに
とって重要なでんぷん源だった。

小指の先はどの球塊茎は、「アイスアイモ」と呼ばれ、
幕府の探検家、松浦武四郎も阿寒一周の際に、アイスに
ならってアイモガエにして食べている。
木の皮はぎと同じように、イモ掘りも女性の仕事であ
った。シカのツノや枝ぶりのよい木で土を掘り、イモを採
集した。また道具を使わないで素手でむしりとったり、
引き抜いたりもした。手さげ袋に入れ、さらに一カ所に
集めてカマス状の袋に入れて背負い縄で運んだ。

と信じていた。だから子クマは神の国からの来訪者であ
って、大事なマラント(竈)だった。子クマ狩りは神
の子を里へ招待する「儀式」といってもよいわけだ。

アイスはクマの穴を「カムイ・チセ」(神の家)と呼ぶ。
そこを捜し当てるには、長い間に積み重ねた体験と鋭い
観察眼を必要とし、その捜査法は科学的でさえある。ク
マが木登りした爪跡とか、巣の中に敷くササの葉や落葉
をむしりとった跡などが、カムイ・チセへの道しるべだ
った。

子クマはなるべく外光を当てぬように捕えた。そのわ
けは、一歩でも巣を出たクマは闘争本能を身につけ、飼
いにくいからだ。神の子には世俗の風をさけ、コタン
(村)ではオリの周囲にイナウ(木柵)を置いて魔を払っ
た。そして二歳の春、神のもとへ帰した。

これがいわゆるクマ祭りである。

サシ・コタン アイスは冬の家と夏の家を分けた。別
荘などというしゃれたものでなく、自
然に即応した生活が二つの家を持たせた。

料理法は、ゆでるほか、魚肉や山菜と煮込み「ラシク

シク」、またついでモチをつくり乾燥させ越冬食にした。
アイスイモにはニガ味がある。だから二、三日水にさら
してから加工する。煮たものをシエツなきにした保
存食は、つい最近まで見られたし、戦後は都会などで
もこれを代用ベーンに混入して食べた。

神の子を生けどる

クマはアイスの神である。春浅い
うちに、巣の中にいる子クマを生
けどるのは、神の子をわが家につれてくるための重要な
仕事のひとつだった。
「霊送り」と称して、殺すために子クマをとるのは殺生
だとか、大きく育てて毛皮をとるのだから——というよ
うな和人の見方は、アイスには全くナンセンスなのであ
る。

幼い神の子を飼える家は、神に信頼された家であり、
神の子のいるところには悪神が近寄らない。神の子に人
間世界の生活を見聞してもらい、霊送りでそのクマが神
のもとに戻ったとき、その体験を神々に話してもらえる

冬は山にこもり、ときには猟もしたが、大部分は自然
にさからわずに暮らした。夏は海幸や山幸を遁って、平
地に下って生活をした。北海道の地名にサシ・コタン
夏の部落、サシ・ル(夏の道)が多いのは、アイスが生
活した跡である。食糧を求めて山を越えた道がサシ・ル
であり、その生活の根拠地がサシ・コタンだったわけだ
ある。

アウタチエツ(ハマナスの実をとる月)は、ちょうどサ
シ・コタンの時期で、ハマナスの実を採集、干して冬季
間のビタミン補給のために貯蔵した。また、でんぷんを
豊かに含んでいるウベユリの根も懸命に採集した。キウ
タチエツ(ウベユリを掘る月)は、ハマナスより一カ月く
らい早い。

冬の間、全く植物性の食糧を得られないアイスは、こ
の植物採集のできる初夏から初秋にかけて、大事な労働
の季節だったわけである。同じ月であっても、場所によっ
てはアラコイ(キエウリのほる月)とか、カピウ・ノカ
チエツ(カモメの産卵月)のように変わるが、いずれも食

屋を築るための労働を意味し、その土地土地の自然のなりわいにアツサせて廻をつくっていたといえるだろう。

海の死闘

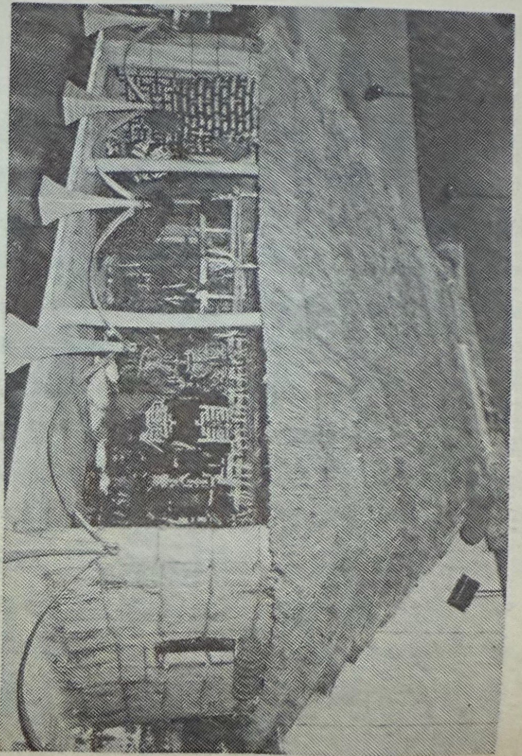
レンソ・カムイ種の酋は海の最高神で、シヤチをさす。シヤチにねらわれたら、巨大なクジラもひとたまりもない。

昔の北海道は、シヤチに追われたクジラが苦しまぎれに浜に近づき、あるいは死体となって打ち寄せられたらしい。そのようなわけで、アイヌは巨大な肉の固まりを届けてくれるシヤチを、海の最高神にした。トドも追われてきてアイヌの生活を潤した。

アイヌの海漁は、もつと勇敢なマドロとりも行なった。いまでも本州南部から棒つき船というカジキマダロの船が北海道の沖合にやってくるが、アイヌもこれと似た方法で鯨でカジキを刺した。

陸地からはるか沖合に海の神々の国があつて、そこに魚(種)の寝床があると考えるアイヌは、小舟をあやつり、寝ている神を起こさぬようにと、人語を謹んで

アイヌの家



行動をしたという。

ねらう獲物はカジキのほか、エチンク(鰻がへ、サナソホ(アンボウ)、エタシベ(トビ)、タンス(イルカ)など、なかでもカジキとは多くの死闘が演じられた。いまのトロリーングでさえヒクグフエツンクといわれるカジキなのだから、夏の沖漁は壮絶なものだったにちがいない。カジキにまつわる伝承が多いのも、それを物語っている。

家をつくる

アイヌの家も古くは穴居だった。穴の上にケツンニという屋根をのせるのが原型である。ケツンニは、三脚(三脚)を二組つくり、それに榎木をわたした。和人の交流が生まれ、地上に家をつくるようになった。この屋根のつくり方はあまり変化していない。またアヘンのように積み重ねて組み立てていくのがアイヌの家づくりの特徴だといわれている。

屋根、壁の材料はヨシ、ササの葉、木皮、そして柱はヘシドイでつくり、部屋は方形一室だけであつた。中央に長方形の炬を持ち、天井を張り、窓を設けた。

白老地方では、東側の短い壁に窓をつくり、その反対側に入口がある。入口をはいると右手(南面)に窓が二つ。前述の東の窓は神々の出入口で、その左手(北東端)に室壇が設けられ、狩猟具、武器、祭具などが置かれた。入口近くの炬辺が家長夫婦の座で、反対側に家族がすわった。炬は最高神であるアヘンチ(火の神)が絶えず燃やされ、入口はセセムという玄關兼物置のさしかけがつくられる場合が多かつた。

新しい家ができると、屋根の両隅に魔よけのヨモギの矢を射込み、木の実や穀物、酒カスや酒をふりまき、新しい家に食物がくるようにと祈ったといわれる。

家を建てる土地の条件として、サケやマスがのぼる川の産卵場近くを最高としたのはいうまでもない。

カムイ・チエノ

と呼んだサケのことである。アイヌが好んで食べた主食は、サケとシカの肉だから神魚とい

うかもしれない。

しかし、それはサケが神の化身という意味ではなく、

神が殺けた魚と解釈したほうがよい。時にはカレイやニシン、そしてシシャモも「カムイ・チエフ」と呼ばれたからだ。

アイヌはサケ魚の始まりを「シン・キマリ」(サケ虫と呼ぶ、ベツコウベエの出現で知り、川口の方向によつて、熊の吉凶を占つたともいわれている。

サケが川をのぼりはじめると、村人総出で漁をした。

「ナベをかけてからサケをとりに行つた、ほど魚群が厚く豊かだった。鉈で刺したり、タモのような網も使つたが、漁は慎重に、そして粗末にされることなく行なわれ、サケの頭をたく棒はイナナ(木幣)のように削りかけのついた木を使つた。いくらとれるからといつて、ただの棒や石で神の魚を殺すようなことはなかった。

阿寒では、サケと同様にヒメマスも秋の魚で、産卵のために川にのぼってくるのをタモですくいあげた。阿寒湖周囲の川にはカベチエフサシナイ(ヒメマスのいる川)、イベシエッ(食糧豊かな川)の名が残っているのは、ヒメマスが豊かだったことを物語っている。

シカ肉は「サケ」ともにニシンを吹いてシカ笛を吹いて(註)の音食だった。言はば文によればシカはエタ・アツ・ナ・カミイ(シカを支配する神)の御る福み袋の中にいっばいあつて、天上からその固まりが投げられる。それを獲るのがシカ狩りだった。エタラソメアリ(シカの降りる山)と名づけられた山が、銅器や土器

地方に多いのもそれを物語っている。

また、日高が「アイヌの都」といわれたのは、シカのよい狩場だったからだ。冬になると、シカは雪の少ない日高地方へ移動し、アイヌの狩人は、その道すじに待ち伏せて狩りをした。ヨコウシ(待ち伏せどころ)という地名は、シカ狩りの名所をさすのである。

アイヌの狩人はシカ笛をよく使った。「ビュー・ビュー」と鳴くシカの声は、求愛のシグナルで、これを聞くと、そこを支配する牡シカが飛び出した。アイヌは、秋になつて発情期の牡が、牝をめぐつて闘争を繰り広げることを知つており、いっわりのシカ笛を使つて獲物を呼び寄

せ、弓で射たのである。

シカ笛は、木をくり、シカの胎児の皮か膀胱、耳の皮、魚皮、樺の木皮などを薄くして張り、吹き口から吹き込んだ空氣が、両手の人さし指で押えた薄い膜を震わせ、「ビュー」と音が出るようにつくれた。

狩りに使う弓は半弓、矢は獸骨。深く刺さるようにくふうされ、また体内にとどまつて、トリカブトの毒が獲物を麻痺させるように作られたという。

神送りの月

アイヌにとつて旧暦の正月に行なうイオ祭りである。動物をなぶり殺す野蛮な祭事ではなく、信仰にもとづいた生活儀式でもある。

クマやキツネ、タヌキ、フクロウ、ワシなどを神の檻に飼つておき、人間の生活をつくりと見聞、体験させて神の国へ送り帰す儀式がイオ・マツナなのである。

野獸の姿を借りた神の国は、人間が近寄ることも、行くきつくこともできない奥山であり、大空と沖合遠いかなだにある。神々が人間界に遊びに来るとき、それぞれ思

シカ笛を吹いて

コタンを訪問した神は、やがて人の手によつて仮死状態(首をしめたりして)にされ、正気に戻ったとき、人々が差し出した宝物、酒、乾魚、飯をみやげに受け取り、美しい刺繍のある着物を着て、神の国へ帰って行くのである。さまざまな模様を彫った花矢をつけてやるのは、神を招いたことの証で、模様は招待者の家紋をきざさんだ。

「神さまよ、私の一家を忘れず、またどっさり肉を持って遊びに来て下さい」

(神謡)を半分だけ演じるコタンもある。語りが最高潮に達するとヒタッと中止する。そうすると残りを聞きたい神が、またみやげ(肉)を持つて遊びに来るといふ演出である。

神送りの儀式は、こうした信仰にもとづいたものだから、いかに半面では、神は死ぬことなく無様に食ひついて、すべてが凍結する冬の生活の中で、豊かな食糧を謳歌してくれる——こう信じなければ、北国の冬はどうして暮らすことができなはどきびしかった、ということもできる。

生活の不安におののく人々の心は、登すことによって動物が絶えてしまふと考えることは、耐えられぬほどの苦しみたつたのだらう。

こうしたアイヌの心を知り、イオマンテ、クマ祭りのかがり火を見れば、また新たな感興がわいてくる。

アイヌの信仰はアニミスム（草木や石にも靈魂があると考える）にシャーマニスム（原始宗教）が加わったものらしい。万物すべてに神が宿り、人の後頭部のつけ根にも神が住んでいてと信じる。だから「神送りの月」のところで述べたようなイオマンテを行なうのだ。しかしアイヌの神は、太和民族のそれのように絶対神ではない。

見のご託宣に従ったが、その人が寒さに弱い人だったりすると、「寒さに弱い神（両生類の動物）がついてる」と信じた。それらの神をイノカ（似形）に偶像化して信仰したのである。だが、雨の神とザルの話のように、その人に不利なことが続いたりすると、「神さん、これほど信じているのに、なぜあんたは私をしつかりと守らないのか。だから、ほかの神が私に悪さをする」あたかも自分の神がサボっているから……となじたりした。

アイヌの神は、このように人間くさいのである。

魔を払う アイヌの人たちは、あらゆるものに靈魂が宿ると信じた。物がこわれると靈魂は離れて神の国へ戻り、人間と同じ生活をする。この世で有用なものはよい靈魂、すなわち神で、用がすむと丁重に送り帰す儀式を行なった。しかし、有害なものは惡靈が宿っていると考え、それを排除して再びコタンに來ないよう儀式を行なった。その仲だちはシャーマンの仕事だ

たとえばこんな話がある。

その年は雨が降り続きアイヌを悩ませた。そこでアイヌたちはザルを外において雨の神に語りかけた。

「雨の神さんよ。あんたはきげんが悪くしてしょうがないようだが、そんなにあはれるなら、この器いっぱいに雨水をためてみな。それができないなら、おねがいだからおとなしくしておくれ」

また強い風が吹いて人々を困らせると、こんなふうにも言った。

「風の神さんよ。いいかげんに風を静めてくれないと、ここに用意した灰をまくぞ」(灰が風の神の目にはいると、う意味だらう)

つまり、神はアイヌを守り、豊かにしてくれるものであつて、それが裏切られると神に平伏するのではなく、寂滅の祈りをしたのである。風に向かつて刀を振るったりするもの、その刃が神の目の前で風を切り、さしもの神も恐れをなすと考えるからである。

アイヌはそれぞれに個人の神を持っていた。その多くは夢

った。

病魔を避けるために、悪臭のするニワトリの木を門口に立て、トゲのあるタラの木も置いた。キタコジの木は芳香を放つが、それを逆手にとって病魔をおどしたりした。重病にかかると、火の神に頼んでニワトリの木の病気を追い払い、神を呼び寄せ、またキツネの頭やチカビナウ（鳥木彫）の頭部のような削りかけを立てかけて、病魔退散を祈った。

そして薬石効なく人が死ぬと、迷った靈魂がその家にとりつかないように、急いで遺体に模様のない古い着物を着せてから、蒲で編んだムシロに包み、すべての魔物がきらいなニワトリの木でつくった串で封じこめた。遺体を搬出するときは、家の隅を破つて足のほうから外に出し、破れ口はすぐにふさいだという。死者が戻つても、出口がわからなければいけない——と考える処置だったらしい

頭を東にして土中に寝かせ、埋葬がすむとクラウ（露標）地方によって形が異なる）を足元に立てた。西南部の男

たちは、符箓をするための「類型」女は針を形じて丸い穴のあいた毫標をたてた。

葬式のあとで、カンアツネ（小屋送り、チセツラリ（家を持たせる））といって小屋を焼く風習は、夫婦のどちらかが先に死ぬときで、残されたものが死んだときは「もう先にいつてゐるから……」と焼かなかつたという。現代ふうには理解すれば、この家焼きもやはり病を払う意味と受け取れないこともない。

シャーマン
アイヌはシャーマン（神と人の交霊術をする人）の口から伝えられる神託を信じ、神がかりの状態になりやすい人を「TRUSURR（トス・クル）」と呼び、男女ともにあつたようだ。カラフトアイヌのシャーマンは太鼓を打つたが、北海道アイヌにはそのような媒体物を使わなかつたようである。
アイヌにはシャーマンという名称や言葉はなかつた。それに近いものとして「サマイクル」（シャーマンをする人、「エサマン」（それでシャーマンをする）、「コタンコロル」（村を所有する人）などの語がある程度。それはコタンの統

随世であつて、必ずしも代々すゝれた交霊術者が出たとは思えないし、私利私欲におぼれたシャーマンを別のシャーマンが呪い殺した話など、やはりシャーマンは大変特異な人間だつたと思われる。

アイヌはコタン（村）の神、家の神を持つ
家紋の発生
ほか、それぞれに個人の神を決め、信じていた。

雷神	
クマ	
シャチの変化	
シャチ	
海神	

家紋のいろいろ

治者（コタンコロル）がシャーマンをする人であつて、それ以外に「特別職」を意味する言語を必要としなかつたのだから。

神がかりになりやすいのは女性に多く、男のシャーマンそれはそれに適切な判断を下し、処置することにとどまつたらしい。つまり女性シャーマンが神託を下し、男が処理したわけで、その男はおそらく後にオテナ（乙名）とか酋長と呼ばれる者だつたにちがいない。すぐれた巫子（シャーマン）は事の善悪を決したり、コタン全体の吉凶、もめごとについて神託を行つたが、世襲ではなかつた。現代でも恐山のイタコをはじめ、神霊術とか霊媒といった現象がみられるように、特異な体質を持つたきわめて感受性の強いアイヌがシャーマンになつた。
こうした体質はやはり遺伝性のもので、女性に多い。したがつて世襲ではなくても、その血筋はシャーマンの地位を守り続けたにちがいない。ただ女性からの遺伝は

個人の神の決め方は、多くの場合夢見によつた。ときには、その人の特性にしたがひ神を定めた。たとえば寒さに弱い人は、両生類の神がついていけると信じたり、クマとりの名人はクマの神、沖漁のじょうずな人の神はアコロであつたり、シャチだつたりした。これらの神々を信じ、祈りを神に通じさせたいとする気持から、神の形に似せた物体をつくるようになり、さらに図形へと変化し、家紋が発生した。

トピアツの枝を丸くして上で結ぶと太陽神。それを半分に切つた形が月といつたぐあいに決めていたが、クマ、キツネ、沖漁の魚族など形ににくいものはイトツバ（それを刻む）といつて象形的な模様にした。後にそれは海陸の動植物別、またその組み合わせが決められ、世襲的にその人の男系の家紋となつた。
ひとつの家紋は父から息子、またその息子と伝わり、養子にいくと二つの家紋をあわせ持つこともあつた。
ところでこの家紋は、後に所有の権利を示すものに代わり、私有のしるしになつた。コタンの祭事などで物品

の貸借があった場合、家紋によってそれを整理した。しかし、近世になっても家紋は依然として神につながるものとして信じられ、家紋のついた物品がかけたり、傷つくことをいみじらった。

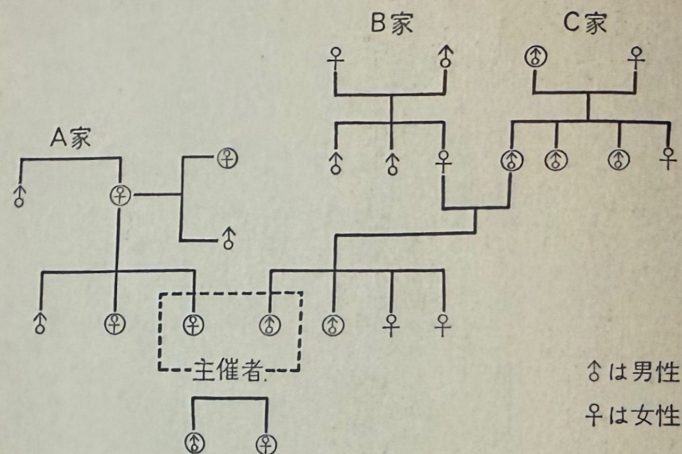
この家紋は男系であることは前述したが、女系はこれに代わるものとして貞操帯を用い、代々同じ特徴の帯を伝えた。家紋、貞操帯は近親結婚などによる血の乱れを防ぐうえでも重要な意味を持ったのである。

女系の家紋

アイヌの親たちは、息子や娘が自分で使う生活用品をつくれるようになると、一人前と認め、結婚を許した。

アイヌ語のハウツルンクルは仲人の意味で、双方の親の間に立って仲介の労をとった。求婚の形式は一樣ではなかったらしいが、言い伝えによれば、男性は木彫りの物品を好きな娘に送り、また女性からは一針一針心をこめて刺繍した手甲やハチ巻きをプレゼントして、意中の人がそれを身につけてくれると、意が通じたことになったという。

シヌラッパに参加できる人
(○で囲まれた人)



好きな女性がどうしてもなびいてくれないときは、呪術などの非常手段に訴えることもあったらしい。しかし基本的には、男女それぞれが持っている神の力が互角でなければ、その結婚は不幸に終わると信じられていた。神の力関係の判断は、夢見やシャーマンのご神託によったといわれている。

ところで「メノコユーカー」に、女性が肌につける「ラウクツ」(下の帯)と呼ばれる貞操帯が出てくる。クマに襲われたときこれを振って難を逃れたとか、風の神さえも目をつぶって方向を変えたと伝えられている。

この不思議な帯は、ツルウメモドキやオヒョウダモの皮の繊維でつくるが、大事なことは前述したとおり女系の家紋ということだろう。糸のヨリ方や線による印(本数)によって家紋を決めた。

婚家へいっても、嫁ぎ先のものは使わず生母のつくったものを継承、死ぬと同じ家紋の一族のもとへいくと信じられた。

娘が一人前になっても、母親からこれをもらわれない

うちは、結婚は許されなかったという。帯の家紋は何代にもわたって同一の女系に伝えられるから、前にも述べたように、結婚による血の乱れも防ぐことができたと考えられ、民族の血を守る面で重要な役割を果たしたといえる。

しかし夫に先立たれると、野辺送りの途中、草の中にそっと置いてくるとか、夫に持たせてやったという象徴的ないじらしい話も少なくないのである。

シヌラッパ シヌラッパとは、先祖祭りのことである。

神送り(クマ祭りなど)が終わると、それぞれの家庭に一族が集まり、酒をくみかわし、代々その家に伝わる先祖の法要と、その血筋を伝える子どもたちの育ちぶりなどを語りあって、楽しいひとときを過ごした。

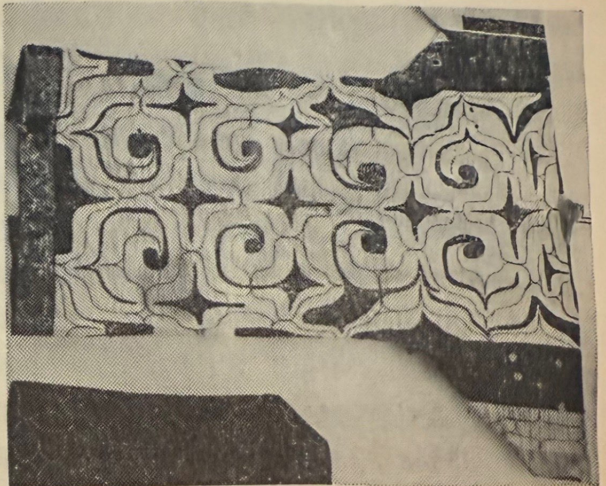
このパーティーはかなり盛大に行なわれたらしい。しかし、日本人的な感覚でみるなら、親の兄弟をはじめ、その息子の嫁、あるいは嫁ぎ先の人たちまで加わってさぞやにぎやかに想像するのだが、アイヌの場合はちょ

つとした規律があつて、そこに参加できる人たちは前ベ
ーシの図のなかで、○で囲んだ男系と女系に限られ、主
催者夫婦の女系(祖母、母親、嫂)と男系(祖父、父親と兄弟)
しか宴席に並べなかつた。そのほかの親類、縁者は、ツ
ーはじきの格好になつたが、それもアイヌの人たちがそ
の血筋、家系をいかに重要視したかを物語るものといつ
てよいだろう。

ここでおもしろいのは、婿養子にはいつた場合で、生
家の血筋と、養子先の家系にも加わる仕組みになること
がある。両家にかかわる祭事になんとしても親を出さな
ければならぬわけだから、なにかと物入りなことだつ
たらしい。とはいえ、家系の絶えるのを心配して養子を
もらつたくらいだから、日本の場合と意味が違ふし、大
切にされた。

それで決まらない場合は、組打ち、シツ(棒打ち)、ウ
カラ(互いに打つ)を行なつた。これは双方に争いを起
こさせる悪い神がついているから、棒でたたきあつて
その魔神を追い出すという、お払いの意味を持つてい
た。

しかし、シツは集団の間では、しばしば闘争の原因に
なつた。



両袖に綱目を入れた、巴模様のアイヌの着物

ランタと称した。

祝宴のさいの余興のひとつに、「出陣の舞」という歌
舞がある。一組に分かれて手をたたき、ひざを屈伸させ
ながら前後進する踊りだが、もとはコタンの間で黒白を
争つたときの裁判劇の名残りだという。コタンの争いだ
から双方から何人もの代表が出て、お互いの主張を述べ
合い、黒白を争つた。このときの形が歌舞として演じら
れるわけだ。アイヌの裁判は理論闘争がその中心だつた
ことも、主張が相譲らないケースが多いから、最後
は悪い人間を白状させるため、さまざまな方法が用いら
れた。比較的に多かったのはサイイモン(湯探り)といふ
方法である。

古代日本にもあつたもので、煮えたぎった湯の中にあ
る物体を素手で拾ひ、正しいほうはサケドをしないと信
じられていた。また護符である動物の頭かい骨を頭から
落としてその方向を見たり、盃さかずきを頭の上にのせて落と
し、落ちた形、つまり表裏で黒白を決したりした。

なつたという。集団(コタン)同士の決着は、女性を談
判の使いに立て、チャランケをしても決しないときは、
二派に分かれて棒で打ち合い、石を投げ、双方に死人が
出るまでなぐりあつたというのだから、これがエスカ
レートすると、弓矢まで用いて自己の主張を正当化した
という。

こうした争いは、和人の勢力が浸透すると、しだいに
姿を消していった。

アイヌの文様は、北海道の重要な観光
文様は魔よけ
民芸のひとつである。ことにアツシは
たいへんな人気がある。

旭川市に住んでいる木内アヤノさんはアイヌ文様を芸
術品に仕上げて全国的に知られた。
このように人気のあるアイヌ衣服の文様には、魔よけ
の秘密があるのだそう。一枚の着物を広げると、
いたるところに綱目の模様がはいっている。これはクモ
の巣から出たもので、病魔が忍び入りそうな袖口、襟
元、裾に綱目を入れ、この模様を「アイウシノカ」(トゲの